



赤
花

6

2020

りっかはいくかい

山田六甲 秋 麦 紳

五月の空は白しながし

マナウスへ羽ばたくといふ揚羽かな
滝奥に飯炊いてゐる夫婦かな
わが弟子は腰を養生若葉冷
あおのりさん覆盆子を提げて来たりけり
稲美野に雉子鳴かせてをりにけり
麦秋のおかつぱ頭走りけり
春宵は待賢門院璋子手に
佐津さんのお別れ手紙花は葉に
ある人は亀鳴くといふ鳴くだらう
長靴をこのごろ履かず栗の花
骰子の壺は赤色梅は実
大鮎を七輪の火が弾きけり
鳴きながらカバンの底にゐる子猫
食麩麩を一本もらひ春の風邪
猫まんま犬が横取り昼寝覚
弟子は腰われは眼を病む新樹の夜
眼を手術しても亀鳴くのは見える
ソーダ水小指で氷まはしけり

雛の客 笹村 政子

雪嶺抄

玄関をはみ出せる靴雛の客
雛段の牛車にのつてゐる私
喪の家の夜明けてきたる花杏
亀の甲洗ふ兄弟うららけし
黒鍵にエチュード生るる春の宵
木瓜赤し色を尽して迫りくる
ちぎれては軽くなりゆく春の雲
蓬摘む母の視界のありどころ
鳥影の土手の末黒を翔ちにけり
海峡の潮の昂る涅槃かな

独活の香 志方 章子

蟋蟀抄

春めくや無沙汰の友を訪ねむか
砂浜を大きく使ひ若布干す
防腐剤匂うてきたる雛人形
海に竿させば若布の掛かりきし
紅梅の細枝の生みし雨の粒
紅梅のまばらなるとも明るかり
しつかりと子の手の握る雛あられ
秘密の恋なんてお洒落ね花ミモザ
飯入りをらぬ飯蛸買はさるる
独活の香や幸せとはこんなものか

はまなす抄 ミモザ明かり 升田ヤス子

鳥帰る和毛ひとつを木に残し
城山に喫泉一つ風光る
散り際の梅の香りや道真忌
城垣にひびく師の声麗らけし
青ぬたやこの播鉢は祖ゆづり
若布採る人ゐて埠頭あを臭し
踏青や足に憂ひのある夫と
喘息の子を抱き雛と覚めゐたり
籠り居やミモザ明かりと風愛し
花一輪日は柔らかき暈をもち

藤生不二男

大石忌

山稜抄

きさらぎの風に吹かるる光かな
海峡の青きうねりや莖立てり
足元を照らしゆく燈や大石忌
窓打つて春の霞のしぶきけり
春宵の嬰兒のねむれる乳房かな
降る雨に山茱萸の黄のまばたけり
さざ波の渚にくづる蘆の角
山国の日の残りたる流し雛
日と影のあはひに春のしぐれかな
ぶらんこの漕げば月日のさかのぼる

住田千代子

千代子抄 余寒

善野 行

桜漬

藍那抄

梅が香を日差しの方へ嗅ぎにけり

こぼれ来て古木に遊びゐる目白

馬酔木咲くふつつ鯉のあぶくとも

水底の苔に日の射す余寒かな

気紛れに解けし光り猫柳

蹠跟けたる立春大吉の崖の縁

木の洞の深みに春の光かな

石噛んで幹のふくらむ春の色

木葉髪片寄せて読む七部集

雨脚の中に聞きとむ初音かな

青空や子を負うて出る梅の下

緑青の擬宝珠の下を春の水

青春の悲哀は言はず卒業歌

雛流しむかし小さな手に添へて

春寒し竿竹売りの流し声

湯を注せば春さきがけの桜漬

谷口 一献

春の海

養老抄

永田万年青

青魚

妙音抄

水垢離の青唇が轟けり

春の海天とまぐわい全部青

青空を埋め尽くしゐる梅八分

一段と碧空澄むや雲雀笛

青天の果てまで舞ひて揚雲雀

青い声強弱つけて山笑ふ

踏青やそぞろ歩きも厚底で

青饅のぴりりの少し物足りぬ

青空に入りて満開梅の花

受験子の毎度のおかず青魚

稲美野や見渡す限り麦青む

伏目して少し笑みゐる雛流す

約束の改札出れば朧月

大橋の真中より先朧かな

青芝に嬰を立たせて歩ましむ

ゆりかもめ譲らる杭に止まりけり

出口 誠

体温

箕面抄

田尻 勝子

桜

肥後抄

子育ての我が身につらし春の風邪

一日を寝て過ごしたり春分日

体温に一喜一憂春の午後

春の朝読経の声も静かなり

桜咲く鳥居の赤とピンク色

いらいらの頓服きれて春の夜

丸き穴一つに一本桜咲く

熱の訳わからぬ医者よ春の宵

桜占むかはたれ時の背戸の空

たんぽぽの黄の一つまみ一つまみ

雛流し嘘泣きをして手を離す

青き踏む雁回山の麓まで

青空の深きが悲し辛夷かな

地の中の生送る雪柳

造山の激しさ語る新樹光

春風の自動ドアを開けにけり

平居滯子

夜道

山をみな抄

廣畑育子

絹莢明かり

長田抄

雛の待つ家へと夜道急ぎけり

雛遊び幼きながら恋めきて

春寒や猫と体温分かち合ひ

姉作る人形達に春愁あり

いく度も見上ぐ辛夷の苔かな

墳丘の名残の校庭卒業す

電柱の太き影置く犬ふぐり

茎立の葉ぼたん昨日より今日へ

三つ四つ咲いて絹爽明かりかな

青銅の馬に涙の春の雨

翡翠の巣穴へ青き空曳けり

竹藪の淵にさざ波落椿

大内幸子

姑の客

作用抄

枝垂梅玄関先へとこぼれけり

姫辛夷一枝手折りて姑の客

別れ霜駅へと急ぐ女学生

投函の確かな音の花便

氏寺の八十八ヶ所山桜

眠る山起こして別れは唐突に

江見 巖

磯巾着

相生抄

満ちてくる潮見て帰る浅蜷取り

シヤンソンの夜の波際磯巾着

負け鶏を夕焼の野に帰したる

春の風邪プラットホームを攫ひけり

朽ち舟の水につかりし猫柳

受験子のなるようになれへそ曲がり

延川五十昭

玻璃戸

延川抄

大そろばん置きある喫茶春時雨

ちりめん に 椿染めある春暖簾

辛夷咲くちりめん街道蚕絲神

振袖は丹後ちりめん雛の客

ゆがみたる玻璃戸の中の明治雛

夕闇の白木蓮や天主堂

延川笙子

丹後ちりめん

つつじ抄

曾祖母の丹後ちりめん雛飾り

菜の花やここは蕪村の母の里

手作りの帯地のべべのお雛さま

土壁の剥げし旧家や雛飾る

荃立ちや昭和の天井喫茶店

猫歩くシャッター通りの雛祭

喘息の子を抱き雛と覚めりたり

升田ヤス子

夜中に喘息に苦しむ子をあやしたり、なだめたりと言わず、雛と覚めていたというのが佳い。子ども
の胸をさすったりで母は一睡もできない。子を抱いてあやしながら雛に縋りつく思いであったにちが
ない。子をあやしながら夜明けを待ち耐えていた。この句に理屈も技巧もない。竹下しづの女のように
「短夜や乳ぜり泣く児を須可捨焉乎（すてつちまをか）」とエモーショナルにならず必死で守る母の姿を
淡々と詠んだ。「六花の俳句を体得するまでコロナで死ねない」と言っていたヤス子もコロナ禍を抜け
出したようだ。

六花集



菊谷 潔

すれちがふ寒の戻りをうぐひすと

寂しさやうぐひすまでがさびしがる

うぐひすの声に安堵の音の春

風に舞ふ程は残らぬ春の雪

竹藪にうぐひすこもる余寒かな

磯野青之里

春浅し青磁香炉のたたずまひ

三元号経たる顔雛ゆかし

下駄箱の上は禁中雛飾り

折雛やまんがタッチの黒丸目

茎立ちの生氣溢るや花黄色

田尻 勝子

源平の世にも流れて春の川

平居 淳子

秘めやかに古墳の椿色をなす

延川五十昭

道真忌墨痕にじむ漢詩かな

生田川であろうか。平家物語・巻九の源平の合戦にも出てくる生田川は新神戸駅からJR三宮駅に向かって大きな通りになっているが、昭和42年の大水害のときは激流となって下水管の鉄蓋が十メートルほど吹き上がってその上を通っていた女の子がふきとばされる事故が起きた。昔の生田川である。源平合戦の時代にもその流れはあった。作者はその水の流れと歴史の流れを見て往時を偲んでいるのである。

秘めやかとは「内におさえて人目に立たないようにするさま」であるが、何かエロスを秘めたような色の椿を思い起こさせる。枝に咲いているよりも落ちた椿の方が秘めやかさを纏うようだが、掲句のように古墳に咲いた椿は時を遠く超えて古代の秘めやかな世界が地中から湧きだしてきた古代の秘密の色のようにも思える。ふと古墳の主はどのような人物だったのだろうかと思像が膨らむ。

道真は醍醐朝の右大臣にまで昇りつめた。しかし謀反を計画したとして、大宰府へ左遷され現地で没した。死後怨霊と化したと考えられ、天満天神として信仰の対象となる。『怨霊とは何か・菅原道真・平将門・崇徳院』（中公新書より）。現在は学問の神で漢詩人でもあった。そのことを偲んで怨霊を慰めるために詠んだのであろう。延川五十昭は中国文化に詳しく何度も中国を訪問している。

延川 笹子

日脚伸び美豆良の長き大師像

廣畑 育子

蜜柑の筋丁寧にとる孤独かな

美豆良（みずら）は長くのばした頭髪を左右に分けて両耳の付近で束ね、垂れた髪を輪に巻いて紐で結んだものである。掲句最初は勘違いしてはて？と思ったが、大師は「だいし」でなく「たいし」と呼ぶのだと悟る。聖徳太子のことである。聖徳太子については諸説あつてはつきりしないが『古事記』（712年）では上宮之厩戸豊聡耳命（かみつみやのうまやとのとよとみのみこと）、『日本書紀』（養老4年、720年）では厩戸（豊聡耳）皇子のほかに豊耳聡聖徳（とよみみさとしようとく）、豊聡耳法大王、法主王、東宮聖徳と記されていて、諸説あるなぞ多き太子だが、仏教を日本に広めようとしていた

ことで知られているし、昔の一万円の肖像でも知られている。掲句は加古川の太子ゆかりの鶴林寺でのものだろう。日脚が伸びて太子像のミズラを照らしている光景。太子のミズラの輝きに日本が明るくなればいいのに、とう願ひも込めて詠んだのであろう。

人は孤独で無聊を託つとき、どのような行動をとるのだろうかと思像する。育子の場合普段は取りもしないミカンの白い筋を丁寧に取りついているのだ。取りながら、つくづく孤独だなあ、という思いがふつふつと湧いてくる。

一方孤独に苛まれるときには、皮ごとミカンを丸呑みするかのような行動にも出る。孤独の極みの時には俳句に打ち込むだろう。俳人は吟行したあと推敲を重ねていると時間を忘れているときがある。育子のような素敵な人を孤独にさせる者は地獄へ堕ちる。